

乙 第 号

藤本憲太 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

## 論文審査の要旨及び担当者

報告番号	乙 第	号	氏 名	藤本憲太
論文審査担当者	委員長		教 授	奥地一夫
	委 員		教 授	杉江和馬
	委 員		教 授	中瀬裕之
	(指導教員)			

### 主論文

Expansion of Stent and Lumen Diameters on Follow-up after Carotid Artery Stenting  
in Patients with Carotid Artery Stenosis

頸動脈狭窄に対する自己拡張型ステント留置後フォローアップ時のステント径と  
内腔の検討

Kenta Fujimoto, Hiroyuki Hashimoto, Mitsuhisa Nishiguchi, Toshitaka

Inui, Naoki Tani, Kaoru Horiuchi, Megumi Chatani, Ryuta Matsuoka,

Takahide Yaegaki, Ichiro Nakagawa, Hiroyuki Nakase

Journal of Neuroendovascular Therapy

第 11 卷 65 頁 ~ 75 頁 2017 年 2 月発行

## 論文審査の要旨

頸動脈狭窄に対する頸動脈ステント留置術（CAS）は外科的内膜剥離術に比して非侵襲的であり急速に普及している。しかしながら、周術期塞栓合併症の低減が CAS の予後改善への課題となっている。自己拡張ステントでは留置後にバルーンによる後拡張がステントの動脈壁への圧着と最狭窄部を拡張するため標準手技として行われるが、十分な後拡張は塞栓合併症を誘発し治療予後を悪くする。いっぽう、後拡張を行わなければステント及び血管内腔径の拡張が不十分となることが危惧される。筆者らは自施設で行ってきた CAS における後拡張を省く、あるいは最低限にとどめる実施方法の有用性を評価するために、術後のステント径及び血管内腔径の変化について検討を行った。対象は自己拡張ステントを用い CAS を行い、フォローの脳血管撮影が施行された 134 例である。術直後とフォローアップ時の狭窄率の比をステント径と内腔径で計測、比較したところ、ステント径、内腔径ともフォローアップ時に増加がみられた。拡張率はプラークの柔らかさを示すプラーク対胸鎖乳突筋の MRI 信号値比 1.50 以上で高く ( $p=0.006$ )、同様に血栓の存在を示す TOF 像 (time of flight) の高信号群で高い ( $P=0.006$ ) 結果となった。考察ではステントが脆弱なプラークに埋没し血管内腔径に反映されない例もあり、治療終了時には最低限の後拡張を得ておく必要性に関しても言及している。今回の研究は CAS の血栓塞栓合併症を低減するために有意義な研究と評価され、博士（医学）の学位に値すると考える。

## 参 考 論 文

1. Meningioangiomas Not Associated with Von Recklinghausen's Disease  
Kenta Fujimoto, Yuji Nikaidoh, Takashi Yuasa, Kiyoshi Nagata,  
Yuhki Ida, Masayuki Fujioka, Hideyuki Ohnishi, Shinichiroh  
Kurokawa  
*Neurologia medico-chirurgica* 33: 651-655, 1993
2. Cervical ventral epithelial cyst treated by anterior approach  
Kenta Fujimoto, Shozo Kawai, Yoshihiro Tanaka, Yasuharu Watabe,  
Shiro Chitoku, Takatoshi Fujimoto, Takeshi Fuji, Tsuneo Shigi  
*Neurologia medico-chirurgica* 36: 321-325, 1996
3. Intracerebral hemorrhage associated with livedo racemose  
Kenta Fujimoto, Takahide Shimomura, Yoshinari Okumura, Fumiharu  
Kimura, Yoko Takahashi  
*Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases* 9: 139-143, 2000
4. Dysembryoplastic neuroepithelial tumor of the cerebellum and brain stem  
Kenta Fujimoto, Hideyuki Ohnishi, Masahiko Tsujimoto, Tohru  
Hoshida, Yoichi Nakazato  
*Journal of Neurosurgery* 93: 487-489, 2000
5. De novo basilar top aneurysm in an elderly patient treated with  
Guglielmi detachable coils. A case report  
Kenta Fujimoto, Ryota Kimura, Jun-ichi Iida, Shoichiro Kawaguchi,  
Toshisuke Sakaki, Hiroyuuki Nakagawa, Kimihiko Kichikawa,

Toyohisa Fujita

American Journal of Neuroradiology 25; 915-916, 2005

6. Basilar trunk aneurysms with associated fenestration treated by using Guglielmi detachable coils - Two cases report -

Kenta Fujimoto, Shozo Kawai, Taiji Yonezawa, Katsuya Masui,  
Noriyuki Nishi, Mototsugu Maekawa, Ryunosuke Uranishi

Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases 16; 84-7, 2007

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに脳神経外科学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

平成 30 年 3 月 6 日

学位審査委員長

救急病態制御医学

教 授 奥地一夫

学位審査委員

遺伝情報病態学

教 授 杉江和馬

学位審査委員（指導教員）

脳神経機能制御医学

教 授 中瀬裕之